

「学童疎開そかい きおくの記憶」

伊藤照代

あの日から70年が経過した。忘れてはならない、忘れさせてはいけないことに「学童疎開そかい」がある。孫が当時の私のとし年齢になった時に思いを新たにした。

疎開そかいする朝、赤羽あかばね駅で手を振ふってくれた母の顔を私はずっと忘れていない。今、娘むすめがあれ程ほどの事態に直面したら、我が子をあんなに冷静に送り出せるだろうか、これが永久の別れになるかも知れない8歳さいの子を手放すことができるだろうか？

昭和19年7月、王子区堀船おうじくほりふな国民学校3年生だった私たちは大勢の人に見送られて汽車に乗り込んだけれど、楽しい遠足と思っていたのに母の目は真っ赤だった。ほかの見送りの人たちもみんな泣いていた。それが学童疎開そかいだなんてまだ低学年の私には分からなかったし、知らされてもいなかった。小さな駅で降りて随分ずいぶん遠い道を歩いて行った気がする。「興禅寺こうぜんじ」と言うお寺に着いた時は夕方で、蝉せみの音が覆い被かぶさるさるように感じた事と、庭の百日紅さるすべりの綺麗な花きれいの色を今でも不思議なほど良く覚えている。案内された本堂にはすでに東

京から荷物が届いていて、今日からは^{ここ}此处でお友だちと^{いっしょ}一緒に生活をするのだと、付き^そ添いの先生から初めて聞かされて、もう家へ帰れないのだと分かって悲しくなった。

戦争が激しくなってきた東京に住む3年生以上の学童は強制的に^{そかい}疎開することが決まった。^{いなか}田舎に身寄りの無い子供は「学童^{そかい}疎開」と言って、学校単位で地方のお寺などにお世話になり土地の学校に通い勉強をするのだが、私はその最年少組で6年生の女子と一緒に^{あかぎさんろく みはらだ}通った学校は赤城山麓の三原田国民学校で校舎は小さいが、庭がとても広かった。

^{しらみ}虱に悩まされた毎日、食べ物が満足に無くていつも空腹だった。家族に手紙を書くのが日課で、「お母さん、おばあちゃん、早く^{むか}迎えに来て下さい。泣かないで^{かみ}髪を洗わせるから、妹とけんかをしないから。戦地のお父さんは元気ですか？」など書きながらいつも^{はがき}葉書に^{なみだ}涙がこぼれ落ちた。^{ひきがえる}蟻蛙の鳴く真っ暗な夜が^{こわ}怖くて、東京が^{こい}恋しくてみんな^{ふとん}布団にもぐって泣いていた。

村の人たちに親切にされたこと。おにぎりやお芋を^{いも かく}隠れるようにして食べさせてくれた農家のおばさんやお友だち、土地の言葉や遊びで私たちの^{さび}寂しさを少しでも^{まぎ}紛らわせようと心を^{つか}遣ってくれた地

元の寮母^{りょうぼ}さんたちから、本当に優しくしていただいた。池の周りを走ったり、木の実を拾いに山に入ったりした楽しい思い出もあったが、でも、みんないつ帰れるか分からない東京を思いながら

一生懸命^{いっしょうけんめい}に生きていたのだ。

本土上空に敵機が来るようになり、空襲^{くうしゅう}で家族を失う友だちが出はじめて言いようのない不安な毎日だった。戦後、家族も家もなくなって村に残った子供が何人かいたことを、大分後^{だいぶんあと}になってから知った。

群馬^{せたまぐん}県勢多郡^{せたぐん}三原田村^{みはらだむら}上三原田^{かみみはらだ}の興禅寺^{こうぜんじ}。私にとっては生涯忘れることのできない大切なお寺であり、古い山門^{さんもん}と赤い百日紅^{さるすべり}の花や、後ろにそびえる赤城山^{あかぎさん}など、今でも時々夢に見ることがある。

弾丸^{だんがん}の飛び交^かう所だけが戦場ではない。戦争の意味^{おそ}も恐ろしさも知らなかった幼い私たちの、正に戦争だった「学童疎開^{そかい}」の日々。

いつもひもじくて、寂^{さび}しくて、不安だった。こんな戦場もあったと言うことを、その真^まっ直中^{ただなか}を生きてきた子供の目や、心で感じた事実を、私はどうしても語り伝えて行きたいと思っている。

